

令和6年度 自己評価・学校関係者評価 報告書

学校番号	46	学校名	瑞浪高等学校
------	----	-----	--------

学校教育目標 (教育方針)	誠実で、自主的・自立的な人間を育成する 1 誠実な態度を尊び、誠意ある人間関係を築く <規範意識の高揚と自立性の育成・・・責任と役割の自覚> 2 生きる力を育み、一人一人が自己実現を図る <主体的な自己学習力の育成・・・基礎的基本的な学力の定着> 3 健康でたくましい心身と、豊かな人間性を培う <実践を通じた健全な心身の育成・・・豊かなコミュニケーション能力の育成力>		
------------------	--	--	--

3つの方針 (スクールポリシー)	どんな生徒を 育てたいか 【GP】	<ul style="list-style-type: none"> 自己の目標を実現するために、さまざまな可能性や夢に向かって挑戦し、「未来を切り拓く心」を持った生徒 挨拶などの基本的な社会性を身に付けるとともに、自利利他の精神を持って自分と他者を大切にできる、人間性豊かな生徒 自らの役割を考え、自らの信念を持って主体的・能動的に行動し、地域や社会に貢献できる生徒
	生徒をどう 育てるか 【CP】	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人の良さや夢を大切にするための多様な科目の開講や少人数授業、瑞高塾等での個々に応じた学びの推進 授業やクラス活動、部活動の中でのコミュニケーション能力や、他者との関わりの中での人間的成長の涵養 普通科・生活デザイン科における地域探究やボランティア活動などを通じての、生徒一人一人が活躍できる場の設定と自己有用感の育成
	どんな生徒を 待っているか 【AP】	<ul style="list-style-type: none"> 「自分の夢」を持ち、それを叶えるための「志」を持った生徒 素直で思いやりがあり、「何事にも挑戦する意欲」を持った生徒 「人の役に立ちたい」という気持ちを持った生徒

学校の抱える課題	<ul style="list-style-type: none"> 普通科：目標を高く掲げ進学を目指そうとする生徒が少なく国立大学進学者が低迷している。生活デザイン科：成績下位生徒の学びの定着が不足している。 自己肯定感・自己有用感や目標意識が低いと、向上心をもって学習や部活動、様々な課外活動に意欲的に取り組むことができない生徒が少なからずいる。 人間関係を築くことに苦手意識をもつ生徒が多いことに加え発達障害を抱える生徒が年々増加しており、コミュニケーション力を高める指導の必要性が高まっている。 母子、父子家庭、あるいは複雑な家庭環境を背景に持つ生徒が増えてきているため、学校での指導だけでは対応できない事案が増えている。 瑞浪市唯一の公立高校として、同窓生を中心に本校に対する期待は高いが、私学志向や通信制志向の高まりにより、特に普通科において入学希望者が減少している。
----------	---

教育指導の重点	領域・分野	今年度の具体的な重点目標
	進路指導	多様な進路を志望する生徒に対し、一人一人の適性を把握し、より高い自己実現ができる目標を達成させるべく、全職員で連携・統一した進路支援を行う。
	生徒指導	生徒の主体的判断や自己決定を尊重し自己肯定感・自己有用感を育成するとともに、家庭や地域社会、関連する外部機関との連携強化を目指す。
	学習指導	ICT活用や対話重視等の多様なアプローチによる授業改善を進め、生徒の探究心を喚起し、自ら学び続けられる生徒を育成する。
	その他	地域に愛され期待される学校として、普通科の地域探究や生活デザイン科の課題研究で地域連携を進め、将来、地域に貢献できる人材を育成する。

年度目標				
領域分野	3つの方針・具体的な重点目標の達成に必要な 具体的取組・方策	県教育振興基本計画で の位置付け	達成度の判断・判断基準 あるいは評価指標	
進路指導	1年次に職業ガイダンスを新規導入し、3年間を見据えた進路ガイダンスの系統化を図る	13	施策Ⅱ-13	2年次の進路志望調査の未定者5%未満
	進路別講座等の実施を通して特別編成クラスの生徒の意識を高める。	10	施策Ⅱ-10	対外模試の結果分析および進路決定先の前年比較
	地域の大人との交流事業を通じた社会人の育成および勤労観の醸成	13	施策Ⅱ-13	諸活動の事後アンケートの結果分析
	インターンシップ実施拡大とその事前、事後学習の充実	13	施策Ⅱ-13	インターンシップ報告書の分析
生徒指導	エンカウンター活動、演劇ワークショップ等によるコミュニケーション能力の育成	1	施策Ⅰ-1	諸活動の事後アンケートの結果分析
	MSリーダーズ活動、ボランティア活動、地域の大人とともに行う行う活動等による自己有用感の育成	1	施策Ⅰ-1	諸活動の事後アンケートの結果分析
	ほっとプレイスの効果的な活用（SC、S相の活用含む）により不登校を防止する	3	施策Ⅰ-3	不登校生徒数、中退者数、転学者数の経年比較
	生徒自身が運営する生徒会活動、部活動の充実を図る	1	施策Ⅰ-1	学校評価アンケート関連項目の結果分析
学習指導	公開授業週間を年2回実施し、主体的、対話的で深い学びの視点から授業研究と実践を重ね、授業改善を進める	8	施策Ⅱ-8	授業アンケートおよび教員による授業週間の振り返り
	教科を超えてICT機器を用いた授業についての情報交換会・研修会を開催し授業改善を図る	26	施策Ⅳ-26	生徒による授業アンケート結果の分析
	単位制を生かした個別指導、縦断選択による学年を超えた学び合いの推進を図る	8	施策Ⅱ-8	生徒による授業アンケート結果の分析
	検定へのチャレンジと取得による自己有用感・自己肯定感の醸成を図る	14	施策Ⅱ-14	検定の受験者数と合格率の分析
その他	地域連携プロジェクトを活用した探究活動の深化	4	施策Ⅰ-4	諸活動の事後アンケートの結果分析
	中学校との交流活動の充実	20	施策Ⅳ-20	諸活動の事後アンケートの結果分析
	家庭クラブ活動を通じた地域貢献と他世代交流の活発化	4	施策Ⅰ-4	諸活動の事後アンケートの結果分析
	地域のスポーツ団体との連携強化による部活動支援	25	施策Ⅳ-25	大会結果の考察

年度末評価(自己評価)			
取組状況・実践内容 評価項目の達成状況等	評価 A. B. C. D	成果と課題 (○：成果、△：課題)	総合評価 A. B. C. D
<ul style="list-style-type: none"> 1年次6月に国公立大学を含めた大学見学、10月に職業ガイダンス、模擬授業など、キャリア教育の骨格となる活動を実施した結果、具体的な進路希望を持つ生徒が増えた。 進路別講座については教員のたまご発掘事業、教職説明会を実施した。 普通科の地域探究では、地域のコーディネーターとの協働で1・2年次の活動を組み立てた。活動に対して地域での活動や大人との協働について、前向きな意見が多かった。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○1年次からのキャリア教育の基礎を構築することができた。 ○普通科の地域探究活動では、1・2年次生の活動を系統立てることができた。 △特別編成クラスについては、次年度以降の活動を具体的に計画することが途中である。 △支援を必要とする生徒が増え、職業体験や企業説明会に参加しても、十分に適応できない生徒が増えている。 	B
<ul style="list-style-type: none"> ・新入生を対象とし、5月、7月、9月計3回の演劇ワークショップを実施した。 ・朝の挨拶運動、街頭啓発活動、交通安全啓発活動、土岐川清掃ボランティア等に参加した。 ・ほっとプレイスへの登校を提供すると同時に必要に応じてSC(スクワカクサー)やスクール相談員、外部機関との面談を実施した。 ・生徒会を中心に生徒自らが学校行事や身なりに関する意見や考えを発信できる機会を設定した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○新たな関係を築く機会になったが、その場限りになってしまう様子がある。 △活動を通し役割や責任感、自信を高められる生徒を増やす対策が課題である。 △教室復帰への場となり進路変更する生徒は減少したが、不登校への対応は課題である。 △生徒の判断や決定を尊重する場を設けるとともに、生徒の自己有用感の育成を図ることが大切である。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しくわかりやすい授業がすべての基本で、これは生徒向けアンケート等で十分に示されている。 ・ICT機器は例年どおり多くの教員が活用しており、工夫した活用方法を授業公開週間を通して学び合っている。 ・授業での学びの到達度の確認のため検定を推奨する傾向にあり、合格率も標準的である。 ・今年度より縦断選択の教育課程が始まり、初めて2、3年次生が教室にて一緒に授業を受講した。成果等はまだまだこれからである。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○情報機器の利活用で多くのメリットを感じる。理解度の向上(生徒)、生徒の取組の即時把握(教員)など。 △一方、デメリットは機器の故障や不調への対応が簡単でない場面がしばしばある。 ○機器に強い教員に負担が行くなど。 △以前は英語検定は英語科が窓口となり募集をかけた校内実施等していたが、近年は個人に任せている。将来を考え、英語検定の推奨を呼びかけてもよいかもしれない。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・平原かぼちゃの探究活動については、地元企業、個人と連携し、商品開発、販売に結びつけることができた。 ・8月に行われた一日体験入学において、本校の3つの専門コースに分かれ、高校生が中学生を対象に体験型の授業を行った。(生デ) ・通学路の清掃活動や瑞浪駅への座布団の寄付、老人保健施設への訪問などの活動を行った。 ・水泳競技及び柔道を継続している生徒の各種大会への出場を支援した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ○中学生から体験等を通して「生活デザイン科で学ぶ内容がとてもよく分かった、体験できて良かった」との感想があり、科のPRができたと考ええる。 △一方、実際に体験するまで内容が分かりづらいと言える。伝え方が課題となる。 ○家庭クラブの活動として定着し、特に座布団は地域の方からも評価されている。 △座布団寄付以外の活動についても、積極的にPRする場を設けたい。 ○活動によっては校外へ移行することで高いスキルアップを期待できる。 	

来年度に向けての改善方策等

実施日：令和7年1月6日

<p>(進路指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々に対応した支援の在り方を、学校だけでなく、地域の企業・団体と協働して推進する必要がある。 <p>(生徒指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『よりよい学校創り』を目指して、生徒会を中心とした活動を生徒自らが取り組めるように活動する機会を増やす。生徒自身が意見や考えを発信し、課題解決に向けた活動ができる場を提供することで、自己有用感の育成を図る。 ・個々の生徒に対する支援のあり方が複雑化していることから、生徒理解を目的とする検査結果等を活用し、生徒の課題や特性、背景の理解に努め、不登校等の予防的教育相談の充実を図る。 <p>(学習指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業週間を、教員を主として考えるのではなく、生徒を基準にした公開の方法を模索する。 ・情報機器に限らず、生徒の理解に効果的な教授手段を教員間で共有できるよう整備する。 <p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭クラブ活動をより多くの人知ってもらうため、報道機関などを効果的に活用する。
--

学校関係者評価

実施日：令和7年1月23日

<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価アンケートの結果や生徒の様子から、生徒と教職員の関係性が良好であることや、生徒が教職員に見守られて生活していることが分かる。 ・教職員が生徒一人一人に目を向けていることが伝わってくる。 ・学校の存続のために、教職員や生徒がどのような学校にしていきたいの意見を聞きたい。 ・体調やハラスメント、いじめなどの事案を漏らさずに把握してほしい。 ・学校評価アンケートでの自己評価で、特別編成クラスが来年度の活動を具体的に計画中とあるが、特別編成クラスがより良いものとなることを期待している。 ・貴校の実践を見聞し、中学校経営にも学ぶ点が多々であると強く思った。
--